壕の北の出入口には炊事場があった。カマドを石で作り、シソメー鍋（非常に大型の鍋）を置いただけのものであったが、草や木で偽装してあった。壕内での食事は、軍のカン詰類に乾パン、おにぎりと簡単なもので、時には艦砲の合い間をぬって外に出かけ、キャベツや人参をとって来て青野菜を補給することができた。

水汲みは命がけの仕事であった。艦砲は、遠くでドンという音がして、ヒューと飛んでくる。慣れてくると、至近弾と遠くに落ちる弾との区別がつくようになった。遠くに落ちる場合は、ヒューと長く尾を引くので「今の弾は遠くに行くから安全だ」と判断し、かけ出して行く。安全だとは言っても、いつ別の弾が飛んで来るかわからない。私は、いつも「弾にあたりませんように」と、心でひそかにお祈りした。出かける時は、三つ編みにした髪や、モンペの腰ひもに木の葉をさし込んで偽装した。

カーキー色のぶ厚い布でできた水嚢一杯に水を汲むため、壕から数十メートル離れた一日橋近くまで行く。だが、一日橋あたりは、敵の集中攻撃地点で、与那原の十字路を魔の四つ角と呼んで恐れていたように、そこは地獄の一丁目と呼ばれ恐れられていた。いくら用心して出かけていっても、時には、敵の飛行機が低空で旋回してくるのに出くわしてしまう。

「来たっ」と言って木陰に隠れたり、畑の溝にふせたりして、敵機が去るまで隠れなければならず、そういう時にはせっかく汲んできた水が、全部こぼれていたり、半分に減っていたりしてまた引き返して汲んで来るのであるが、壕にたどりつく間には、結局半分に減ってしまうのであった。水汲みは、危険な上に時間がかかるばかりでなく、雨降りの後など足がすべって坂道を登るのにひと苦労しなければならなかった。

川の水は藻が浮いていて、青く濁っていたが、壕内の小さなポンプのついた濾過器でこすと、真水のような澄んだ水になった。危険この上ない水汲みであったが、一日橋分室での水汲みでは幸い犠牲者は出なかった。

水汲みがすむと、次は炊事の手伝いである。大きなシソメー鍋から、じかに炊き上がった御飯をすくい、「あついあつい」と言って両手を真赤にしながらおにぎりを作り、負傷兵の枕もとにくばって歩く。そのおにぎりも、日に日に小さくなっていった。それでも負傷兵は、誰も文句を言わずがまんしてくれた。

壕の奥にいると、艦砲の音はほとんど聞こえないが、地響きがしてくる。それは不気味なものであった。それでも壕の外と比べると何十倍もの安心感があった。

水汲みの他に、壕の外に出なければならないのは、用足しの時であった。それは、最も恐ろしい時であった。便所は、壕の西出入口近くの畑に穴を堀り、周囲をカヤで囲っただけのものであった。露天便所なので、飛行機にみつかりはしないか、弾が飛んでくるのではないか、とヒヤヒヤしながらそれこそ命がけであった。

壕内では飲料水しかなかったので、一度も風呂に入ることができなかった。身体はあかにまみれ、髪や服はシラミとノミだらけであった。服は、学校の制服から軍のカーキー服に変わっていた。体の細い私には、上着の丈がひざまできて、袖丈も長く、手がすっぽりかくれ、まるで袋の中に入っているみたいであった。それをうまく折り曲げて着け、白百合の校章は忘れずに胸につけた。地下足袋も支給されたが、私の足に合わずブカブカであった。

壕内は、息がつまるほどにムシムシして暑かった。輸送が途絶えて、負傷兵の包帯交換

が思うように出来なくなっていった。そのため膿の臭いが壕内にただよいはじめ、いよいよ息苦しいばかりであった。時々、壕外に出て、新鮮な空気を吸った。

四月に入って、戦況が悪化してくるにつれ、負傷兵がどんどん運び込まれてきた。私たちも休む暇がなくなり、目まぐるしい日が続いた。

負傷兵は、足が半分なくなっていたり、尻の肉がそぎ落とされていたりするといったようなひどいもので、戦闘の激しさを暗黙のうちに語っていた。私たちは、最初その傷のひどさに驚いて、真っ青になって顔をそむけたり、気分が悪くなってすわり込んだり、貧血を起こして倒れたりした。負傷兵の包帯交換は、最初のうち毎日おこなわれたが、そのうち衛生材料が不足しだし、三、四日おきという具合になった。すると、ウジが傷口から湧きだしてきて、包帯の上をはいまわるようになる。

包帯交換の時だけ、ピンセットでウジを取り除く。すると負傷兵は、気持がいいといって喜んだ。ウジにかみつかれると痛いということであった。

壕内は痛さをこらえるうめき声や、のこぎりで足を切り落とす音が満ちみちていた。「ヤンキー死んでも恨むぞ」という叫び声を耳にした時には、恐ろしくて毛布を頭からすっぽりかぶり、耳をふさいでたえた。わめき声がやみ静かになると、もう死んでいるのであった。

負傷兵の数がどんどん増えてくると、正規看護婦の手が足りなくなり、これまで彼女たちが面倒をみていた負傷兵の糞尿の処理を、私たちが手伝うようになった。私たちは、まだ十五、六歳にしかなってなく、糞尿の処理をするのは恥ずかしく、とても嫌なことであった。しかし、それもお国のための奉公だと、自分に言い聞かせてたえているうちに、機械的に出来るようになっていった。

五月に入って、識名分室に行った座間味利子さんが、砲弾にあたって戦死したというニュースが云わってきた。それから間もなくのこと、私たちの壕入口近くにも爆弾が落ち、物すごい爆風が壕を襲った。爆風にたたきつけられて、出入口近くにいた波平節子さんと前田シゲさんとが即死してしまった。それは、私が壕入口から奥に入った二、三秒後の出来事であった。負傷兵も四、五人即死し、壕内はごった返した。

「女学生さん、女学生さん」と、負傷兵の呼び続ける声に気をとられ、級友の最初の死に直面しても悲しむいとますらなく、涙も出ない有様であった。引率の徳田先生も、爆風のショックで口が聞けなくなり、いつも壕の中でボンヤリしていらして「先生！」とお呼びしても、ただかすかに目を動かすだけであった。級友の安里千江子さん、前川静子さんも同じように何かに脅えているようで、いつも二人一緒になって離れず、すわったままになってしまった。私たちは、精神的なショックで生理も止まってしまった。

級友二人の遺体は、衛生兵二人が毛布にくるんで外へ運び出して行くのを見たが、どこに埋めたのか見届けることができなかった。もうその頃には、悲しいという人間の感情が、わたしたちから失われていた。負傷兵の中にも、精神に異常をきたした人たちがでてきた

生きるか、死ぬかという瀬戸際にあっても、男性というものは野獣みたいに欲望をまる出しにしてくるので、とてもこわかった。しかし、わたしたちは引率の先生がいちいち監視して下さり、また軍医がとても厳しい方だったので、その点では安心であった。戦場での女姓の一人歩きは、その意味でもこわいものであった。

五月二十日頃、敵がいよいよ真近にせまってきたということで、島尻へ撤退することに

なった。軍医が、急に「歩ける負傷兵と女学生は早く壕を出て行け！」と、大声で命令を下したので、追いたてられるように一日橋分室を後にした。

一日橋分室には、四十名ほどの負傷兵が収容されていた。ほとんど歩けない重傷患者で、担架で運び出すということもできなかった。そのため、多くの者を壕に残したままの出発であった。歩ける負傷兵は四、五名だけであった。徳田先生や級友の前川さん、安里さんも残したままだったので気がかりであった。最後に、軍医と衛生兵とが残っていたが、その後みんながどうなったのかわからない。

引率には、徳田先生の代わりに新垣仁正先生が来られた。壕を出る時、食料に乾パンを持った。糸数、伊原、米須といった地名は、聞き覚えていたのだが、どこをどう歩いたのかわからない。移動する時は、いつも夜間であったし、ただ兵隊たちの後について歩くだけで精一杯であった。

一つの壕にたどり着くと、そこももう危ないという。また移動する。その途端に直撃弾にみまわれたりするというように、弾に追いまくられての壕探しが続いた。

私たちは、いつも新垣先生について歩いた。壕を転々として、最後にたどりついたのが第三外科壕（現在のひめゆりの塔）であった。そこには、軍医、看護婦、師範女子部、一高女四年生、三年生、民間人、兵隊とおよそ九十名ほどいたように思う。

壕の外は、ひっきりなしに弾が飛んでいた。が、どういうわけか夕方の六時頃になると、きまって静かな時が訪れた。その時に、水汲みや、食料のサトウキビを探しに出かけ、飢えをしのいでいた。

第三外科壕はちょうど壺みたいになった自然壕で、縄ハシゴで出入りしていた。そのため、壕内でも昼は、わりと明るかった。壕の中では、これと言った仕事もないので、ただじっと隠れているだけであった。

第三外科壕に入って四、五日たった頃であったと思う。引率の新垣先生が、「切りこみに行く」といい、敵を一人でもやっつけてから死ぬんだといきまいておられた。そして、円座している三年生一人一人に「行くか」「行かないか」と問いただした。決して強制ではなかったが、全員切りこみに行くことになった。日が暮れてから出発ということになって、わたしたちは、身のまわりのものを整えて待った。そしてあと一時間ほどで壕を出るという時に、ガス弾を投げ込まれたのである。

級友が「敵が上に来ている」といった。一瞬みんなシーンとなって、奥でじっと身を固くしてかたずをのんでいた。わたしは恐ろしくなって、級友の背中に顔をかくした。まもなく、壕の中に何か投げ込まれ、それが岩にあたってパッと青い火が散った。私の前にいた兵隊の上着一杯青い火がギラギラ光った。兵隊は、黄燐弾だと言って「早くその上着を脱がないと、皮膚がくさってしまうぞ」と叫んだ。またも同じものが投げ込まれ、青い火が飛び散った。

三回目に打ち込まれたのは、白い煙がモウモウとふき出すものであった。アッというまに、一寸先も見えなくなってしまった。兵隊が「ガスだ！」と叫んだので、皆が騒ぎ出した。兵隊は「水筒の水をハンカチに浸してマスクにしろ」と言った。皆は、一つの水筒を奪い合うようにして、三角頭巾や包帯をぬらし、口と鼻をおさえた。次第に息苦しくなってくるので、私は外に飛び出そうとした。その途端、誰かが「つねちゃん！」と私の名を呼んで、片足にしがみついてきた。私は動けなくなり、もたもたしているうちに、手足が

しびれてきたのである。

身体の感覚がなく、意識朦朧とした中で、「天皇陛下万歳！」と叫ぶ声や『海ゆかば』をうたっている声、先生や母を呼ぶ声、そして級友の名を呼びつづけている声を聞きながら倒れていった。その日は、六月十九日であったように思う。

顔にあたたかいものを感じて目が覚めたら、壕の中に陽がさしていた。深い眠りからさめたような気がした。もう昨日の叫び声が嘘のように、壕全体がシーンと静まりかえっていた。

横を向くと、すぐそこに兵隊の死体があったが、私の足もとの方には生きのびた師範女子部生がすわっていた。私は何か話しかけたかった。が、ノドが痛んで、すこしも声にならなかった。手真似で水を飲ませて欲しいと合図した。運よく、私の倒れている足もとの岩から、わずかながら水がしたたり落ちていて、それを脱脂綿に吸い取って、彼女は私にふくませてくれた。なんとか声が出て、話が出来るようになった。今度は体を起こそうとしたが、何か重い石にでもおし潰されたようで、体が動かない。そのうち体がやっと動くようになって立とうとしたが、足が痛くてたてない。みると、左足の太股が真っ黒くはれあがっていた。倒れる時に、岩に打ったようである。

壕内には板を敷いた所があった。日頃そこには軍医と宮崎婦長とがいた。宮崎婦長は、男まさりでとても厳しい人であった。私たちを壕内の岩だらけの上にずらりと並ばせ、敬礼のしかたを訓練するのである。

「軍医長殿に敬礼！」宮崎婦長は、そのやり方がまずいと何度でもくり返させた。その婦長も、軍医とともにガス弾で亡くなられた。

死体がふくれあがって転がっている中を、私は両手に力を入れて、足をひきずりながら生き残った者の集まっている所へ行った。二晩ほど、軍医と宮崎婦長のいた床の上で過ごした。

生存者は、玉代勢先生、兵隊四名ほど、民間人、師範女子部五、六名、一高女四年生一人、そして三年生では私一人だけであった。

兵隊たちは、私の前で地図を広げ、国頭へ突破する相談をしていた。そして、夜壕を脱出していった。玉代勢先生も、師範女子部生も壕を出ていかれた。皆、それっきり戻って来なかった。

その時の生き残りは、師範女子部生の守下ルリ子さんに大城好子さんで、残りは途中で戦死したようである。

壕を出るに出られなかった四人（山城信子、座波千代子、私金城素子、高峯カメ〈民間〉と負傷兵一人が死体の中に取り残された。

私たちは、皆が出て行ってから三日目頃に壕を脱出している。死体はその間に真っ黒になってふくれあがり、ウジがたかって、死臭が激しく、ほとんどたえがたいばかりになっていた。夜シーンと静まりかえっている時、死体からウジが湧き出てくる音が聞こえる。ジャクジャクと聞こえたり、物がグツグツ煮えたぎるような音になったりして、暗闇の中から聞こえてくるのである。

私たちのすわっている所にも、ウジの大群がウヨウヨ押し寄せてくるので、小さな板切れで払いのけるのだが、またすぐにはいのぼってくる。ウジには悩まされたが、死体の間で寝起きしていても怖いという気持は起こってこず、全く私たちは、感情のない生きた屍

同然であった。

食事は乾パンが残っていたし、焼け残ったサトウキビもあって、その根っこの方をかじって命をつないでいた。私たちにまじって、腹部に傷を受けた若い兵隊がいたので「皆と一緒に壕から出て行きましょう」と誘った。若い兵隊は「負傷して歩けないから、あんたたちは早く出て行きなさい。自分はここで自決するから」という。私は何度も「傷は浅いから一緒に行きましょう」と繰り返したが聞き入れてくれず、結局、その兵隊一人を残したまま私たちは壕を出た。

縄ハシゴを上っていくと、上から三段目位の所にウジの湧いた兵隊の死体がぶら下っていた。多分、壕から上ってくるのを待ち受けていた敵に撃たれたのであろう。デレンとたれ下っている死体をこえて、私たちは出て行った。

壕脱出前に、私は自分の着替えの入ったリュクサックを取りに壕の奥の方へ行った。しかし、級友の死体が荷物の上に折り重なっていて取ることが出来ず、そのままにして来たが、その中には女学校での思い出の写真が一杯入っていたばかりでなく、手榴弾も一個入っていた。手榴弾は、一日橋分室から島尻へ逃げる時、兵隊が一人一人に配ったものである。敵につかまったら、耳も鼻も切り落とされ、八ツ裂きにされるので、いざという時にはこれで自決せよといって渡してくれたものであった。

私は、とても自分で自分の命を絶つなんてことは出来そうもなかった。生きのびるだけ生きのびようとは考えていたのだが、しかし無事生きのびられるとも思っていなかった。

ガス弾の中で生き返ったばかりでなく、その二日目の夜、あまり咽喉が乾くので一人外に出てキビ畑に入った時、いきなり暗闇の中から銃弾を十発ほど受けた。それも耳もとをかすめて飛んでいった。まったくの命びろいであった。また島尻に来る途中、二メートル位うしろで、ドスンという音がしたので振り向くと、艦砲の不発弾が土中にのめり込んでいた。間一髪の連続の中では、生きのびることなど露ほどにも信じられなかったのである。

壕を出る時、ふと横を向いたら、一日橋分室からずっと行動を共にしてきた金丸節子さんの顔があった。荷物の上にうつ伏せになって、顔を右側に向けていた。美しいお顔であった。

壕から出てみると、そこも黒い死体がふくれあがっていたるところにころがっていた。すべてが焼き尽くされて、こげくさい匂いが充満して煙がまだくすぶっていた。

弾の音は少しも聞こえず、不気味なほどの静けさであった。暗い壕の中からやっとはい出してきた私たちにとっては、すべてが失せてしまった壕外の荒廃より、陽のあたたかさがしみじみと思われるのであった。天上の青い空、流れる白い雲、輝く太陽の美しさは、言葉に尽くせるようなものではなかった。

座波さんと肩を抱き合って、しばらく青空をみていた。私たちは、もう一度泉の水を飲みたいと思った。東の方に井戸があると聞いていたので、足は自然にそこへ向いた。完全に歩けるのは私だけであった。あとの三名はビッコをひいた。山城さんは砂糖キビを杖に、高峯さん（民間人）と私は、座波さんを抱えよろめき転びながら、はげましあって歩いていったのである。

その途中で民間人に出会った。八十歳ぐらいの白髪の老婆と、五十歳ぐらいの男の方と、四、五歳くらいの女の子が一緒であった。その人たちは食料を持っており、夕食の準備をしている最中であった。親切にも私たちに御飯とお水を下さって、いっしょに壕の中に入

れてくれた。小さな自然壕であった。頭がつかえるので、膝小僧を抱いたままより添って一夜を明かした。

翌日、アメリカ兵に見つかった。呼びかけてくるが、わたしたちは恐ろしくてちぢこもっていた。すると脅しのつもりか、銃で岩をうった。砂塵が壕の中に入ってくるので、鼻と口をおさえていた。突然、老婆が「私はもう年もとってグソー（あの世）も近いから、いつ死んでもかまわない。私が先に出て行く」と言って外へ出た。しばらくすると、老婆が「どうもしないから出ておいで」と声をかけてきた。皆ゾロゾロ穴を出た。

私は軍のカーキー服の上着をつけていたので、アメリカ兵はあやしいと思ったのか、私一人に銃をつきつけた。アメリカ兵は、上半身裸で毛むくじゃらであった。赤毛で目は青く、陽にやけた真っ赤な顔をしていたので、本当に鬼みたいにみえた。

アメリカ兵三名ともに、胸に十字架をかけていた。それをみて、私が「ユーアークリスチャン？」と十字架を指して言ったら、目をしばたたいて銃を下ろし、赤いビラをみせた。そのビラには「両手をあげて降伏せよ」という文句が書いてあった。それを皆にみせて、手をあげてもらった。私はくやしくて両手をあげる気になれず、片手を胸のあたりまであげた。

アメリカ兵は、水筒を渡して水を飲めと言う。毒が入っているかも知れないと思って「ノー」と首を横にふると、飲んでみせた。安心すると同時に、皆で分けて飲んだ。チョコレートもくれた。座波さんは歩けなかったので、アメリカ兵がシャツに棒切れをさしこんで担架を作り、病院まで運んで行った。私たちは道端にすわって、トラックの来るのを待っていたが、その間、いろいろと食べ物をくれたり、家族の写真をみせてくれたりするので、「ナイス」と言ったりする余裕も出てきた。十字架をかけているので、殺すことはしないだろうと、何かしらホッとした気持になった。

もうその時には、敵として憎いという気持もなくなっていた。

トラックに乗せられて、糸満の収容所に連れて行かれ、まずそこに収容された。海岸に近い畑のあとの原っぱで、テントが張られていた。しばらくして宜野湾の野嵩収容所に移され、そこからまた久志に移動した。

ヨモギをつむために、畑の畦道を歩いていると、二人の中年の女がソテツを切っていた。聞くともなしに、二人の話を聞いていると、それは伊江島の方言であった。わたしはなつかしさのあまり二人の所へ近づいて行った。私の祖父は伊江島航路の船長をしていたので、伊江島の方ならほとんどの人が祖父を知っていた。私が家族のことを尋ぬると、隣りの村にいるとのことであった。

二人は「船長さんのお孫さんが元気に帰ってきた」とまるでわが事のように喜んで下さり、さっそく家族のいる所に連れて行ってくれた。祖父母と弟に出会った時は、泣いて抱きついた。

祖父母は私を探して収容所のテントを一つ一つまわったそうであるが、探し出せなかったとのことであった。

【『ひめゆり塔をめぐる人々の手記』（仲宗根政善　角川春樹）所収】